

血液型と性格

—公開講座受講生が収集したデータに基づく俗説の再検討—

長谷川芳典

要 旨 昭和62年度長崎大学公開講座で収集された諸データをもとに「血液型（ABO式血液型）と性格」に関する俗説を科学的心理学の観点から見直した。血液型人間「学」者が主張する行動特性についての調査、YG検査における性格因子得点と性格類型の判定、及びPFスタディ検査を用いた欲求不満場面での反応のしかたに関する調査のいずれにおいても血液型と性格との関連性は認められなかった。また、コンピュータが日本人の平均的血液型分布に等しい確率でランダムに抽出した架空の血液型分布標本を提示する実験から、ほんらい偶然的な変動の範囲内にある偏りに対しても主観的には「偏りがある」と判断される傾向があることが指摘された。

長大医短紀要1: 77-89, 1987

Key Words: 血液型、性格、血液型人間学、科学的心理学

序 論

本稿の目的は、昭和62年度長崎大学公開講座「血液型と性格」において収集された諸データをもとに「血液型（ABO式血液型）と性格」に関する俗説を科学的心理学の観点から見直すことにある。

「血液型と性格」に関する検討は、元来は、学術研究の1つとして始められた。その中心的役割を果たしたのは、長崎県出身で東京女子高等師範学校教授の古川竹二の諸研究^{1,2)}である。もっとも、学術研究が発端とは言え、小学生に気質調べのための血液検査を行なおうとして新聞から批判されたり、「履歴書の一項に『血液型』を追加 新採用者の性格を知る為 各方面に応用の機運」という紹介記

事が載るなど、彼の気質説は昭和の初期にはかなり世間を騒がしていた模様である。³⁾ 彼の説はまた、部署の適性判断や兵員の効率的配備をめざす旧日本軍に注目され、第二次大戦時にはO型者のみから編成された部隊がルソン島に派遣されたこともあったという。⁴⁾

「血液型と性格」をめぐる主張は、戦後、能見正比古の『血液型でわかる相性』⁴⁾を口火として再登場し、今日のブームをつくりだした。能見正比古は、中学生の頃に古川の説をなんらかの形で知り、その後、東京帝国大学工学部寮の委員長をしていた頃に血液型による行動特性の違いを確信するに至り、さらに『血液型でわかる相性』の読者アンケートなどを通じて、独自の学説に関するデータの裏付けを行なったという（大西、⁵⁾ pp. 107-111）。1981年能見正

比古が死去された後には息子の能見俊賢が「血液型人間学研究所」を設立するなど、ブームの延命に奔走している。

いわゆる「血液型人間学」関連書籍の発行部数は1983年～1984年頃をピークにいくらか下火になってきているが、その総点数は約230冊、50億円の売上を誇っている。^[2] いくつかのアンケート調査によれば、「血液型人間学」を信じるという人、あるいは「血液型と性格」にはなんらかの関係があると思っている人が、なお過半数を占めている。^[3] さらに、週刊誌はもとより一般新聞の記事に至るまで、有名人を紹介するさいに、年齢や出身地とともに血液型が堂々と書かれている例がかなりの数にのぼる。^[4]

「血液型人間学」が、たんなる遊びや占いごっこであるうちはよいが、「科学」を標榜し、求人や結婚などその人の一生を左右しかねない問題に対して少しでも影響をあたえる恐れがあるとすれば重大である。にもかかわらず、最も関係が深いはずの心理学者は、どちらかと言えば、この問題を無視しつづけていたように思う。戦後のブームに対して心理学者の立場からなされたコメントとしては、大村^[5]・長谷川^[6]など数名による学会発表、あるいは数点の啓蒙的書籍（大村^[5]、矢田部^[9]など）があるのみであり、膨大な数の「血液型人間学」関連書に比べれば、これらが一般の人々の目にふれる機会は極めて少なかったのではないかと思う。しかも、これまでに心理学者によって公表されたデータは大学生を被験者としたものがほとんどであり、日本人全体から無作為に抽出されたデータとは言い難いという欠点もあった。

「血液型人間学」を否定するにしても肯定するにしても、まず、公正かつ客観的な方法で多様なデータを収集し引用可能な形で公表する必要がある。本研究は、その一環として、特にこれまで不足していた一般市民層からのデータを収集し、「血液型人間学」の妥当性・

実用性に関して検討を加えるものである。

調査1. 血液型と行動特性

まず、血液型によって日常生活場面での具体的な行動特性に違いがあるかどうかについて調査を行なった。血液型人間「学」者は、しばしば、日常生活場面での行動や種々の好みに関して血液型による違いがあると吹聴している。そのひとつ、能見俊賢が「正しい血液型の知識を普及させる目的で子供たち向けて書いた^[5]」という「学習まんが ふしきシリーズ 血液型なぞとふしき」（能見^[10]）には、「書道の下じきのいろを選ぶとき、O型は紺色が多く、次に赤色が多い」とか、「A型は、長電話になりがちな人が多い」というような記述がみられる。そこで本調査では、この書籍の記述をもとに質問紙を作成し、各血液型者が自分に一致する血液型の行動特性を表わす質問項目をどの程度肯定するかについて検討した。

方 法

回答者 長崎大学公開講座を受講した一般市民とその知人95名（男39名、女56名；年齢は14～75歳）および短大生38名（全員女性、年齢は18歳～20歳）、合計133名。

質問方法 まず、「血液型と性格のあいだに関係があると思うか」「血液型人間学にかんする本を何冊くらい読んだか」について質問した。行動特性に関する質問内容は、回答者自身に関する24問（以下“自己評価”と呼ぶ）と、回答者の最も親しい人に関する16問（対象者の選択は回答者に任せた、以下“他者評価”と呼ぶ）から構成されている。いずれも「あてはまる」「どちらともいえない」「あてはまらない」の3件法により回答させた。

①自己評価に関する質問項目の作成：各血液型別に、上掲の「学習まんが ふしきシリーズ 血液型なぞとふしき」（能見^[10]）の記述から、「A型は、長電話になりがち

な人が多い」、「O型は日記を書くのが、わりあいすきで、いつまでも大切にする」などといった、行動特徴を表わした文を6個ずつ抽出した。つぎに、それらの文から「○○型は」の語句を取り去った質問項目を作成した。なお、B型に関しては、適切

Table 1. 調査1の質問項目

★印は自己評価・他者評価の両方、☆印は自己評価のみで採用した項目である。実際の質問用紙においては、どの血液型を表わすのかについてはいっさい知らせず、各質問をランダムな順に並び変えて提示した。

【A型に関する質問項目】

- ☆部屋の中でこまごまと動くのが好きである。
- ★テレビ番組では、楽しいお笑い番組などが好きである。
- ☆日記を書いていてもメモするような感じである。
- ★試験の時など、あがってしまい、ふだんの実力を出せないことがある。
- ★長電話になりがちである。
- ★部屋の模様替えをするのが好きである。

【B型に関する質問項目】

- ★思いつくとすぐ電話をかけることが多い。
- ★テレビを見ながら勉強するなどの“ながら族”である。
- ★日記は思いつきで書いても長続きはしないことが多い。
- ★テレビ番組は、気が向けば何でも見るほうである。
- ☆ちょっとした思いつきで自由な行動ができる。
- ☆けんかをしても、すぐやめてしまう。

【O型に関する質問項目】

- ★日記を書くのが、わりあい好きで、いつまでも大切にする。
- ★テレビ番組では、スポーツや西部劇などが、わりあいに好きである。
- ☆一見きれいにしたようでも、つくえの中などごちゃごちゃにしていることが多い。
- ★好き、嫌いがはっきりしている。
- ☆学習した割合と進歩の度合が比例する。
- ★電話するとき、長話などあまりしないで、用件を上手に伝える。

【AB型に関する質問項目】

- ★清潔好きである。
- ★人に何かを頼まれると、いやとは言えないことが多い。
- ★誰に対しても公平につき合う。
- ★テレビ番組は夢の多い漫画や空想的な物語が好きである。
- ☆日記を書いていても捨てることがある。
- ☆電話がかかってくると喜ぶが、自分からすすんで電話をかけることはあまりない。

な質問項目が5個しか見当らなかつたので、残りの1項目に限り別の対談記事^[6]から質問を作成した。Table 1に、作成された24の質問項目を示す。

②他者評価に関する質問項目の作成：自己評価に関する質問項目のうち、他者に対しては評価が困難であると思われた項目を、各血液型につき2個ずつ削除し、残りの16項目について質問した。Table 1. に、残された16項目を★マークを付して示す。

集計方法 各質問項目に対する血液型別の肯定率、および本当の血液型と「血液型気質得点」との関係について自己評価と他者評価に分けて集計した。

①各質問項目に対する血液型別の肯定率：もし、能見俊賢が主張するような行動特性がそれぞれの血液型において見られるのであれば、たとえばA型に関する質問項目に対してはA型者が他の血液型者よりも有意に多く肯定するはずである。そこで、それぞれの血液型の行動特性を表わしている質問項目に対して、対応する血液型者とそれ以外の血液型者が、それぞれどの程度「あてはまる」と肯定しているのかを集計し、これらの肯定率に有意な差があるかどうかについて、点相関係数（φ係数）を求め、さらにイエーツの補正を適用したうえで χ^2 検定を行なった。

②実際の血液型と「血液型気質得点」との関係：それぞれの血液型の行動特性を表わしている質問項目に、「あてはまる」と答えた場合には2点、「どちらとも言えない」は1点、「あてはまらない」は0点を与える。血液型別の合計点を算出し、これらを血液型気質得点とした。たとえば、A型者が、B型に関する質問項目のうち3個に対して「あてはまる」、2個に対して「どちらとも言えない」と回答した場合、その人の「B型気質得点」は、 $2\text{点} \times 3 + 1\text{点} \times 2 = 8\text{点}$ ということになる。このようにして、各被験者（回答者または回答者の知人）について、血液型別の気質

得点を算出し、その人の血液型に対応した血液型気質得点が単独最大になった場合には「一致者」、その人の血液型に対応した血液型気質得点が他の気質得点とともに複数最大になった場合は「中間者」、それ以外の場合は「不一致者」として分類した。もし、能見俊賢の記述が正しいならば、一致者が圧倒的多数を占めるはずである。

結 果

具体的検討に入る前に、被験者の構成について記す。まず、回答者の中で「血液型と性格のあいだに関係があると思うか」という質問に、「そう思う」、「どちらかと言えば、そう思う」と答えた人は59%、「血液型人間学にかんする本を何冊くらい読んだか」という質問に、「1冊以上」と答えた人は55%を占めた。回答者の血液型は、A型者が49名(37%)、B型者が32名(24%)、O型者が43名(32%)、AB型者が9名(7%)であった。これらの血液型分布は、日本人の平均的な血液型分布^[7]から有意には偏っていなかった($\chi^2 = 1.22$, $p > .25$)。また、他者評価に際して回答者が選択した「最も親しい人」の内訳は、配偶者34名(26%)、親21名(16%)、子供3名(2%)、兄弟38名(29%)、恋人9名(7%)、親友27名(20%)、その他1名(1%)であった。これらの人々のうち、血液型不明者7名を除いた者の血液分布は、A型者50名(40%)、B型者31名(25%)、O型者37名(30%)、AB型者8名(6%)となっており、この血液型分布についても、日本人の平均的な血液型分布から有意には偏っていなかった($\chi^2 = 1.59$, $p > .10$)。

①各質問項目に対する血液型別の肯定率

自己評価に関する24個の質問項目の ϕ 係数は、中央値0.067であり、-0.179から0.285までの値をとった。このうち、イェーツの補正をほどこした後の χ^2 検定で有意と判定されたのは、AB型に関する1項目のみ

(「電話がかかってくると喜ぶが、自分からすんで電話をかけることはあまりない。」)であった。いっぽう、他者評価に関する16個の質問項目の ϕ 係数は、中央値0.056であり、-0.079から0.142までの値をとった。イェーツの補正をほどこした後の χ^2 検定で有意と判定された項目は1つもなかった。

Table 2. 実際の血液型と「血液型気質得点」との関係

自己評価			
	一致者	中間者	不一致者
A型者	7	16	26
B型者	1	9	22
O型者	6	14	23
AB型者	0	9	0
合計	14	48	71

他者評価			
	一致者	中間者	不一致者
A型者	4	17	29
B型者	1	11	19
O型者	5	10	22
AB型者	0	4	4
合計	10	42	74

②実際の血液型と「血液型気質得点」との関係

自己評価、他者評価それぞれについて、各血液型者を一致者、中間者、不一致者に分類し、Table 2に表示した。

考 察

全体として能見俊賢の記述に否定的な結果を得た。

まず、各質問項目に対する血液型別の肯定率については、自己評価と他者評価を含めた40の項目のうち、 χ^2 検定で有意と判定されたのは、AB型に関する1項目のみであった。他の項目、たとえば、「テレビ番組では、樂

しいお笑い番組などが好きである。」という行動特性は、能見の記述では A 型の特性とされているが、実際には、A 型者と非 A 型者の肯定率のあいだで何の差も見られない。少なくとも実用的観点から見ると、「血液型人間学」は、初対面の人の行動特性を知る上では何の役にも立たず、むしろ無意味な先入観を与えるだけであると思う。なお、AB 型に関する 1 項目で「血液型人間学」を支持する方向で有意な差が得られたが、AB 型については、もともと総人数が 9 名と少なく χ^2 検定の結果をそのまま肯定的に解釈できないという点に留意する必要がある。

次に、実際の血液型と「血液型気質得点」との関係については、一致者と中間者を合わせても、不一致者の人数に満たないという結果が得られた。すなわち、自己評価では 71 名 (53%)、他者評価では 74 名 (59%) が、自分の血液型とは異なる「血液型気質」をもっていることになる。今回の調査では、「血液型と性格のあいだに関係がある」という質問に肯定的に答えた人、あるいは「血液型人間学」にかんする本を 1 冊以上読んだという人がいずれも過半数を占めており、回答結果が「血液型人間学」を支持する方向に歪む可能性がじゅうぶんにあった。それにもかかわらず、半数以上が不一致者であったことは、能見の記述がいかにいい加減なものであるかを物語っていると思う。

調査 2. 矢田部ギルフォード性格検査 (YG 検査) 結果と血液型

「血液型人間学」の記述の妥当性は別として、とにかく「血液型と性格」のあいだになんらかの関連があるとするならば、それは科学的手法にもとづいて作成された性格検査の結果に反映するはずである。ここでは、矢田部ギルフォード性格検査（以下“YG 検査”と略す）を実施し、血液型による違いがみられるかどうか検討した。YG 検査を用いた検討

としては、すでに詫摩（632 名、森本他,¹¹⁾ pp. 88 による）、長谷川⁷⁾ (662 名) などの調査があり、いずれも「血液型と性格」の関連を否定する結果を得ている。しかし、これらはいずれも 20 歳前後の学生を対象とした調査である。今回は、これに対して、一般市民を中心として調査を行なった。

方 法

対象者 長崎大学公開講座を受講した一般市民とその知人 129 名（男 45 名、女 84 名；十代～七十年代）。補足資料として、学生 752 名（男 543 名、女 209 名）のデータを引用した。学生のデータは、長谷川発表データ⁷⁾ 662 名分に、短大生 90 名の新しいデータを加えたものである。一般市民の血液型は、A 型 51 名 (40%)、B 型 27 名 (21%)、O 型 39 名 (30%)、AB 型 12 名 (9%) であった。また、補助資料として引用した学生の血液型は、A 型 285 名 (38%)、B 型 182 名 (21%)、O 型 208 名 (28%)、AB 77 名 (10%) であった。 χ^2 検定によれば、いずれの血液型分布についても日本人の平均的な分布からの有意な偏りは認められない（一般市民 $\chi^2 = 0.14$, $p > .50$; 学生 $\chi^2 = 5.55$, $p > .10$ ）。

集計方法 まず、YG 検査で測定される 12 個の性格因子得点の平均値・標準偏差を、男女別、血液型別に求めた。次に、各対象者ごとに、5 種類の性格類型（A 類：平均型、B 類：行動型、C 類：平穏型、D 類：管理者型、E 類：現実逃避型）に属するかを判定し、典型、準型、亜型をコミにした性格類型の人数分布が血液型によって異なるかどうかについて χ^2 検定を行なった。

結 果

一般市民の性格因子得点の平均値・標準偏差を Table 3 に示す。男子合わせて 24 の因子得点のうち、21 因子については平均値の差が 5 点未満であった。Table 4 には、性格

Table 3. YG 検査の因子得点平均値と標準偏差各数値は平均値、括弧内の数値は標準偏差を示す。

男性 (45名)					女性 (84名)				
	A	B	O	AB		A	B	O	AB
人数	16	10	12	7	人数	35	17	27	5
D	5.8 (6.3)	7.3 (5.7)	6.8 (5.3)	8.1 (5.4)	D	8.1 (5.8)	6.6 (5.4)	9.0 (5.7)	9.8 (6.1)
C	8.4 (5.2)	11.0 (5.4)	8.3 (3.8)	6.3 (4.4)	C	8.8 (4.6)	8.4 (4.9)	9.1 (4.4)	12.0 (3.6)
I	7.1 (5.9)	6.4 (5.5)	6.1 (4.1)	5.4 (4.1)	I	7.8 (5.3)	4.5 (4.1)	6.8 (5.0)	11.6 (4.8)
N	8.6 (5.0)	7.3 (5.5)	6.0 (3.4)	6.7 (5.0)	N	7.6 (4.6)	4.9 (4.2)	7.9 (4.1)	8.4 (4.8)
O	7.4 (5.2)	7.5 (4.2)	6.0 (2.5)	6.9 (2.4)	O	7.6 (3.8)	6.2 (3.5)	7.2 (3.6)	9.8 (3.9)
Co	7.6 (4.7)	6.5 (4.7)	6.3 (3.5)	7.4 (5.6)	Co	5.6 (3.7)	4.1 (2.4)	5.5 (4.7)	6.4 (1.6)
Ag	13.2 (3.3)	13.1 (2.4)	9.0 (2.7)	10.6 (5.3)	Ag	10.3 (3.9)	9.9 (4.0)	9.4 (3.9)	9.0 (4.7)
G	12.1 (6.1)	13.2 (5.9)	9.0 (4.6)	11.9 (4.1)	G	12.5 (4.5)	13.6 (5.3)	11.4 (3.6)	7.2 (4.4)
R	12.8 (4.2)	14.2 (3.5)	8.9 (4.8)	9.9 (4.4)	R	11.3 (4.8)	12.8 (4.3)	10.1 (4.5)	8.8 (4.8)
T	12.4 (3.6)	11.9 (4.9)	11.2 (5.3)	8.9 (3.6)	T	9.9 (4.4)	11.9 (3.1)	9.3 (4.5)	12.2 (6.1)
A	11.4 (4.1)	12.2 (4.1)	7.5 (5.5)	10.6 (4.5)	A	10.0 (4.5)	12.7 (5.3)	10.6 (4.2)	8.6 (5.6)
S	12.6 (5.0)	13.5 (5.3)	9.0 (5.8)	10.7 (6.1)	S	13.1 (4.6)	14.8 (5.2)	13.0 (4.3)	10.4 (4.3)

Table 4. 血液型別の性格類型の比率

YG検査結果にもとづいて分類した性格類型の人数分布を血液型別に示す。各類型には、典型・準型・亜型を含む。

社会人全体 (男45名, 女84名)					
性格類型 血液型	A類	B類	C類	D類	E類
A型者	9	9	7	23	3
B型者	2	4	3	16	2
O型者	5	5	11	15	3
AB型者	3	2	3	3	1

学生全体 (男543名, 女209名)					
性格類型 血液型	A類	B類	C類	D類	E類
A型者	68	46	57	46	68
B型者	45	31	34	36	36
O型者	53	29	53	37	36
AB型者	13	14	13	12	25

類型の比率を一般市民と学生に分けて血液型別に示した。性格類型の人数分布が血液型によって異なるかどうかについて χ^2 検定を行なったところ、一般市民、学生のいずれにおいても有意な差は認められなかった（一般市民 $\chi^2 = 9.09$, $p > .50$; 学生 $\chi^2 = 13.80$, $p > .25$ ）。

考 察

性格因子得点の平均値、性格類型の人数分布とともに、血液型の違いによる顕著な差は認められない。

性格因子得点の平均値は、その大部分が各血液型のあいだで 5 点未満の差しかなく、その他についても標準偏差の大きさを勘案すれば大差がみられない。かりに、平均値の見かけの大きさだけで比較するにしても「血液型

人間学」の主張とはいくつかの点で矛盾していることがわかる。たとえば、能見は、A型気質として「協調、チームワークを重視する」、B型気質として「気分のゆれが大きい」、O型気質として「気分が安定している」などをあげているが(いずれも大村¹²⁾の記述による)、もしこれらが正しいならば、気分の変化の大きさに対応するC因子得点はO型で高くB型で低いこと、非協調性に対応するCo因子得点はA型が最も低くなるはずである。しかし、男性ではB型のC因子得点が最も高い、男女ともA型のCo因子得点は必ずしも低くない、など平均値の見かけの大きさだけを見ても矛盾点が露呈してくる。さらに、能見俊賢¹⁰⁾(pp. 115)は、「O型が人をまとめするのがうまく、指導していく力があります」と述べ、その例として総理大臣経験者をあげているが、今回の結果では、支配性に対応するA因子得点は、むしろB型のほうが大きくなっている。

もし、特定の性格傾向に関して、その傾向が極端に強い者と弱いものが特定の血液型者に見られた場合には、他の血液型者に比べて標準偏差の値が有意に大きくなるはずである。しかしこの点においても、血液型による標準偏差の著しいばらつきは得られていない。

性格類型と血液型とのあいだにも何の関連もみられなかった。もちろん、「血液型気質」と性格類型が一致しなければならない理由は何もないが、少なくとも、それぞれの血液型の中に5通りの性格類型をもつ人々が存在することは、血液型だけでは、相手を理解したり、相性を論じたり、あるいは相手の適性を考えたりすることはできないということを示している。

調査3. 欲求不満場面における不満反応のパターンと血液型

血液型による行動特性の差は、日常生活場面一般よりも欲求不満のような特殊な状況で

現われるかもしれない。欲求不満場面での反応をみるための代表的な投影法検査であるPFスタディの一部を用いて、この問題を検討した。

方 法

対象者 長崎大学公開講座を受講した一般市民とその知人94名(男38名、女56名; 10代~70代)。血液型分布は、A型37名(40%; 男15名、女22名)、B型20名(22%; 男9名、女11名)、O型32名(34%; 男11名、女21名)、AB型5名(5%; 男3名、女2名)であった。これらの分布と日本人の平均的な分布とのあいだには有意な差は認められない($\chi^2=1.80$, $p>.50$)。

手続 PFスタディ検査(成人用日本版)の24の場面のうち最初の8場面について回答させた。回答内容については、検査手引(住田他¹³⁾)に基づいて、11通りの基本パターン(E', I', M', E, E, I, I, M, e, i, m)またはそれらの組み合わせパターンとして評点し、血液型別に出現頻度を算出した。なお、組合せパターンについては、その要素となる基本パターンが0.5反応ずつ出現したものと見なした。

結 果

各場面において、30%以上の頻度で出現した反応パターン、および20%以上30%未満の頻度で出現した反応パターンをTable 5に示す。

考 察

各場面で高頻度で出現した反応パターンは、血液型のちがいにかかわらず、驚くほど的一致をみた。対象者が少なかったAB型者、および場面6を除いては、いずれの場面でも1個以上の共通反応が出現している。欲求不満場面という特殊な状況においても、血液型による顕著な反応の差は認めがたい。なお、場

Table 5. 欲求不満場面における不満反応のパターン

PF スタディ（成人用日本語版）の1～8の場面を用いた。各場面番号について、上段は30%以上、下段は30%未満20%以上の頻度で出現した反応を表わす。

なお、E*, I*, M*は、障害優位型の反応を示す。

場面番号	血液型			
	A型者	B型者	O型者	AB型者
1	E		E M	M
	M	E M		I* E e
2	I	I	I	I* I
	i	i	i	
3	e	E e	e	M* E*
	E		M* E	
4	M	M	M	M
	M*	M*		E
5	i	I i	I i	i
	I			I
6	m		m	e
			I	M i
7	E E	E	E	M* E
	E	E		
8	E* M*	M*	E* M*	E*
	E*			M* M

面6においてばらつきが生じたのは、この場面での反応の中に分類困難なものがあったためであると思う。^[4]

調査4. 少人数の血液型分布に対する主観的評価

最後に、「血液型人間学」が受け入れられやすい背景を探るために、少人数の血液型分布に対してどのような主観的評価がなされるのかについて検討した。能見父子は、しばしば、少人数の専門集団における血液型分布の偏りを彼らの主張の根拠にしているが、じっさいに統計的検定を行なってみると何ら有意差が見い出せないケースも多い。たとえば、能見正比古は、都道府県知事の血液型分布が

A型が22名、B型が7名、O型12名、AB型1名であることから、都道府県知事にはA型が多くこれは綿密な行政能力がA型気質と結びついているためであるなどとしている（能見^[4]、pp. 18）。同様に、漫才師53人のなかでAB型が26.4%を占めていることを、AB型の協調性や人との調和性と結びつけていた（能見^[4]、pp. 20-21）。しかし、これはいずれも通常の統計的検定を施した場合には偶然的変動の範囲におさまってしまうのである。こうした錯覚は、少人数におけるちょっとした偏りにも意味があると思いこんでしまう傾向があるために生じるものと思われる。そこで、この傾向を確認するため、コンピュータを用いて、日本人の平均的な血液型分布に合致するような確率でランダムに抽出された架空の血液型分布標本を作成し、それらに対してどの程度の偏りが感じられるかについて検討した。

方 法

回答者 長崎大学公開講座を受講した一般市民の一部30名。

手続 あらかじめ、コンピュータ（日本電気製PC9801VM2）を用いて、大きさが10, 20, 30, 40, 50名であるような架空の「血液型分布標本」を20個ずつ作成した。作成方法は次のとおりである。まず、標本の大きさ分だけRND関数によって0以上1未満の乱数を生成させる。この乱数の値が0.381未満の時はA型者、0.381以上0.599未満のときはB型者、0.599以上0.906未満の時はO型者、0.906以上の時はAB型者が1名抽出されたものと見なし、人数をカウントしていく。これによって、A型者38.1%，B型者21.8%，O型者30.7%，AB型者9.4%の確率で抽出された架空の血液型分布標本ができる。

このようにして作られた20×5=100通りの血液型分布のそれぞれについて、日本人の

平均的な血液型分布と比較して偏っていると思うか、それとも偶然的な変動の範囲内にあると思うのかを回答させた。なお、回答者に対しては、あらかじめ日本人の平均的な血液型分布の比率を知らせてある。

結 果

標本の大きさ別に、回答者の 20% 以上、30% 以上、40% 以上、及び 50% 以上が「偏りがあると思う」と判断した血液型分布標本の数を Table 6 に示す。各標本について形式的に χ^2 の値を算出し、^[9] この値の大きさと偏りがあると判断された比率との関係を調べたところ、標本の大きさが 10 名の場合の Pearson の相関係数は 0.846 (Spearman 順位相関係数は 0.650；以下同様)、20 名の場合が 0.813 (0.817)、30 名の場合が 0.824

Table 6. 「偏りがある」と判断された比率が 20%, 30%, 40%, 50% 以上であった架空の血液型分布標本の数。

標本の総数はそれぞれ 20。いずれもコンピュータの乱数に基づいて作成された。

比率	20%以上	30%以上	40%以上	50%以上
標本の大きさ				
10名	16	7	4	3
20名	13	10	6	4
30名	18	14	10	6
40名	16	10	5	2
50名	19	17	10	4

(0.870)、40 名の場合が 0.699 (0.768)、50 名の場合が 0.736 (0.595) となり、いずれも高い相関を示した。

考 察

偶然的な変動の範囲内にあるはずの血液型分布標本に対して、かなりの回答者が「偏りがある」との主観的判断を示した。今回「抽出」した標本はコンピュータが生成した乱数

に基づくものであり、日本人全体から無作為に抽出した標本と何ら変わらないはずである。しかしながら、各 20 個の標本のうち大部分に対しては回答者の 20% 以上が「偏りがある」と判断し、さらに 2~6 個の標本に対しては半数以上が「偏りがある」と判断している。これらの結果は、少人数の標本に対しては見かけ上のちょっとした変動でも何か意味があるかのように受け取られがちであることを見ている。

各標本についての形式的な χ^2 の値と「偏りがある」と判断した回答者の比率には高い相関があった。このことは、基本的には、回答者が「 χ^2 検定的な」判断をする力をもっていることを示すものである。主観的判断における過誤は、回答者の設定する「危険率」が大きすぎることに起因しているように思う。

全体的考察

今回実施した諸調査からは、「血液型人間学」の主張あるいは「血液型と性格」の関係を支持するような明確なデータはなに 1 つ得られなかった。「血液型人間学」の書物が多数の人々に買い求められているのは、「血液型さえわかれば、初対面の相手の行動特性や自分との相性、あるいは相手の適性などがある程度予測できる」といった実用性に起因しているよう思うが、少なくともこうした実用的観点から見るかぎりは、「血液型人間学」は何の役にも立たず、むしろ無意味な先入観や差別を助長するだけであると思う。

「血液型と性格」の問題を論じるにあたっては、もちろん、上記の実用的観点とは別に、基礎科学的な観点からも検討を行なう必要がある。この観点から見れば、今回の調査は、血液型と性格の関係を全面的に否定する資料としてはまだ不十分である。そのような証明を行なうためには、はるかに多数のサンプルが必要であるからだ。たとえば、ある行動特性に合致する A 型者が、日本人の平均的な

A型者の分布より1%だけ多かったとしよう。その妥当性を調べるために500人のサンプルを抽出したとしても有意差が検出できるかどうかは疑わしい。もっとも、だからといって莫大な研究費を投じて何万人もの規模の調査まで行なう必要があるとなると、これもまた疑問に思う。能見氏が私財を提供するならともかく、少なくとも公的な研究費を投じて大規模な調査を行なうにはなんらかの見通しをもつ必要があるが、これまでに得られた資料や関連分野の研究からはそのような見通しがまったく得られていないからである。じっさい、生物学的・医学的にみて、血液型が性格に差異をもたらすと根拠はなく（中原・富塚¹⁵⁾など）、しかも能見俊賢自身が認めているように（大西⁵⁾, pp. 126-127），血液型のなかでABO式血液型だけを問題にしなければならぬ理由はどこにもない。ABO以外の種々の血液型が性格になんらかの影響をもたらすとすると、血液型の組合せは日本人の人口をはるかに上回ることになり^[10] 統計的検証は到底不可能になってしまう。また、能見父子らが集めたと称する「何万人ものデータ」も、見通しを与える根拠としてはあまりにもいいかけんである。彼らの「データ」の大部分は愛読者アンケートといった、「血液型と性格」に関して先入観が形成された人々から得たものである（大西⁵⁾, pp. 109-110）。しかも、能見父子は、具体的質問項目や結果をほとんど公表していない。いずれにしても、印税や出演料等で大儲けをしている者たちが、彼らの主張に不利なデータまでをフェアに公表できるかどうかは疑わしい。

血液型と性格のあいだにごく微妙な相関関係が確認されたとしても、それによって血液型と性格との因果関係が証明されたことにはならない点に留意する必要がある。日本では、北にB型者が多く南はA型者が多いなどと言われており（森本他¹⁰⁾ pp. 80-81），もし北と南の出身者が同数からなる集団に対してな

んらかの気質調査を行なえば、「地域的な気質の差」が「血液型の気質の差」として誤って解釈される恐れがある。たとえば「スキーが好きか」という質問に対しても、北日本の出身者の方がより多くYesと答えるであろう。すると、僅かながらB型者でYesと答えた者の比率が高くなる。しかしこのことからB型気質がスキーの好みの原因となっていたなどと解釈できないのは明らかである。

「血液型人間学」が「当たっている」と受けとめられる原因の1つとして、少人数の標本のなかで偶然的に生じた偏りに対してなんらかの意味を見い出そうとする傾向をあげることができる。調査4からも示されたように、少人数の血液型分布に対しては見かけ上の偏りを感じやすい。したがって、専門職業やスポーツ別に何百通りも標本を集め、その中から見かけの偏りが大きいものだけを拾い出して自分の主張に都合のよいように適当な事後解釈を施せば、いとも簡単に「血液型人間学は当たっている」と思わせることができる。また、もしのちの調査で自分の解釈に都合の悪い偏りが報告された場合には、「時代の変化」などと言ってごまかすことができる（大西⁵⁾ pp. 146）。そのほか、血液型分布が、A型者：B型者：O型者：AB型者=4:2:3:1という日常生活ではあまりなじみのない比率になっていることも目分量による判断を難しくしているように思う。もし、4つの血液型が25%ずつの比率であったなら、人々は日常経験などと手がかりに、どの程度までが偶然的変動の範囲内であるかについて、より正確な判断ができたかもしれない。

調査2のような質問紙法性格検査では、これまでにも「血液型人間学」に対する否定的結果が得られているが^{7, 11)} 能見俊賢はこの種の結果への反論として、「あなたは几帳面な性格ですか？」というような価値観が入る質問項目で血液型分布を調べても意味がない。などと言っている（大西⁵⁾ pp. 146）。しかし

これは、質問の表面的妥当性と因子的妥当性の違いを理解していないことから生じた誤解あるいは曲解である。科学的な手続きを経て作成された質問紙法性格検査では、特定の質問に Yes と答えたからといって、その質問の意味内容に一致する性格傾向を有するとは判定されない。たとえば、「新聞の社説を毎日読みますか」という質問に Yes と答えたからといって几帳面な性格ということにはならない点に留意する必要がある。^[1]

能見俊賢はまた、神経質、几帳面、明るい、暗いといった言葉は、安易な性格表現であるなどと述べているが（大西⁵⁾ pp. 165），これも質問の表面的な意味・印象と、その項目が真に測ろうとしている性格因子との関係を理解していないために生じた誤解あるいは曲解であると思う。たしかに、心理学の諸概念は、しばしば日常生活用語と重複している。しかし YG 検査で測定される「気分の変化」、「劣等感」、「協調性」などの因子は、いずれも因子分析的手続の中で抽出されたものであり、日常生活用語とは独立した概念である点に留意する必要がある。もともと、能見正比古は、「なるだけ価値評価の入らない日常生活での好みや行動の傾向を（アンケートで）答えていただいた……」という方法で、血液型別の基本気質を探っていったという（大西⁵⁾ pp. 110）。その過程で、質問の表面的妥当性と因子的妥当性をどう区別したのか、あるいは性格因子や気質因子をどのような客観的基準に基づいて抽出していったのであろうか。じつは、血液型人間「学」者が用いる性格用語の大半は、それらがどういう基準や手法で選ばれたものであるかが全く明らかにされていない。たとえば、能見¹⁴⁾ (pp. 64-65) は、「親分の O 型、リーダーの A 型、親方の B 型、大黒柱の AB 型」、「ごますりの O 型、ごもつとも A 型、たいこもち B 型、調子いい AB 型」などと述べているが、これら血液型別の性格表現がそれぞれどう異なるのかまったく

明らかにされていないのである。能見父子らの性格表現のほうがよほど安易で幼稚であることはもはや明らかであると思う。

「血液型と性格」の関係を論じること自体には、心理学の検討課題として意義はほとんど認められないかもしれない。しかし、現実に多くの人々が俗説に惑わされ弊害がおこりかねない事態になっている以上、今後も、様々な角度からこの問題に関する具体的なデータを集め、それらを基に科学的な心理学の考え方を普及していくことが必要であると思う。

謝 辞

本研究のデータ収集にあたり御協力いただいた、昭和 62 年度長崎大学公開講座「血液型と性格」受講生の皆様方、及び、公開講座の実施と本稿執筆のために多数の貴重な資料をお送りくださった日本大学の大村政男教授に感謝いたします。

注

- 【1】陸軍 16 師団輜重兵第 16 大隊。
- 【2】読売系テレビ番組「巨泉のこんなモノ いらない『血液型性格判断』」1987 年 12 月 6 日放映による。
- 【3】たとえば、大村政男他が男女学生 412 名に行なったアンケート調査で 54%（森本他¹¹⁾ pp. 100 より引用），本稿調査 1 の回答者 133 名では 59% が肯定的回答をしている。
- 【4】1987 年現在連載中の毎日新聞特集記事「トマト」，1987 年 12 月 18 日毎日新聞掲載の韓国次期大統領の紹介記事など。
- 【5】大西赤人との対談のなかで、能見俊賢は「……活字に親しみにくい部分がある子供たち向きに、漫画という形で、正しい血液型の基本知識の本も出す予定でいるんですけどね。」と語っている（大西⁵⁾ pp. 179）

- 【6】Business Quarterly（中部・北陸・近畿版, vol. 6, 36-39, 1987）における能見俊賢の発言「……（B型は）ちょっとした思いつきで自由な行動ができるんですね.」から質問を作成した。
- 【7】本稿では、能見正比古等が使用しているA型者38.1%, B型者21.8%, O型者30.7%, AB型者9.4%の比率を日本人の平均的血液型分布として採用した。
- 【8】この場面では、i反応とm反応のどちらに分類すべきかが回答内容だけからでは判別しにくいケースが多かった。
- 【9】統計学上は、このような少人数の標本について χ^2 を求めても χ^2 分布に近似できないため検定の対象になりにくい。
- 【10】森本他¹¹⁾によれば、1億5116万5440通りになるという。
- 【11】ミネソタ多面人格目録（MMPI）という性格検査では、「新聞の社説を毎日は読まない」という質問にNoと答えると、虚構点が加算される。
- 出版社、東京, 1971.
- 5) 大西赤人：「血液型」の迷路，朝日新聞社，東京，1986.
- 6) 大村政男：「血液型性格学」は信頼できるか，日本応用心理学会第51回大会発表論文集, pp. 23, 1984.
- 7) 長谷川芳典：「血液型と性格」についての非科学的俗説を否定する，日本教育心理学会第27回総会論文集, pp. 422-423, 1985.
- 8) 大村政男：血液型と性格，詫摩武俊(監)：パッケージ・性格の心理第6巻性格の理解と把握，ブレーン出版，東京，1986, pp. 212-230.
- 9) 矢田部順吉：性格とは何か 血液型性格論を信じるのは……だ？！，太陽出版，東京，1986.
- 10) 能見俊賢：学習まんが ふしきシリーズ 血液型なぞとふしき，小学館，東京，1986.
- 11) 森本毅郎のTBS日曜ゴールデン特版編：血液型人間学のウソ，日本実業出版社，1985.
- 12) 大村政男：血液型気質説の回顧と展望，日本大学心理学研究, 7: 27-42, 1986.
- 13) 住田勝美・林勝造・一谷彊（編）：改訂版PFスタディ使用手引，三京房，京都，1961.
- 14) 能見正比古：血液型エッセンス，サンケイ出版，東京，1977
- 15) 中原秀臣・富塚孝：血液型人間学の嘘，文芸春秋，1985年1月号。

(1987年12月28日受理)

引用文献

- 1) 古川竹二：血液型による気質の研究，心理学研究, 2: 22-44, 1927.
- 2) 古川竹二：血液型と気質，三省堂，東京，1932.
- 3) 溝口元：古川竹二と血液型気質相関説——学説の登場とその社会的受容を中心として——，生物科学, 38: 9-20, 1986.
- 4) 能見正比古：血液型でわかる相性，青春

Tricks of ‘Typecasting’ by Blood

Yoshinori HASEGAWA

Department of Generl Education
The School of Allied Medical Sciences
Nagasaki University

Abstsact The present report criticizes the ‘typecasting by blood’, one of the most wide-spread pseudo-sciences in Japan. The results of four examinations (assessments of daily behaviors, Yatabe-Guilford personality test, Rosenzweig Picture Frustration test, and a test of subjective judgments on various distributions of blood types) revealed that ‘blood typing’ is of no practical value in understanding and predicting behavior.

Bull. Sch. Allied Med. Sci., Nagasaki Univ. 1 : 77—89, 1987